

集落支援員と I ターン移住者の集落活動

松 宮 朝

1. 本稿の目的

本稿は、集落支援員、および I ターン移住者による集落活動に関する拙稿（近刊）の補論であり、2016年11月の「“協働”型集落活動」をテーマとした第64回日本村落研究学会テーマセッションにおける筆者の報告（「集落支援と集落再生—京都府綾部市、福知山市における I ターン移住者、集落支援員の実践から—」）に基づいている。ここでは、京都府福知山市と綾部市という2つの自治体における、I ターン移住者と集落支援員による実践をテーマとしたが、論文化する際に、紙幅の都合により、福知山市の事例を割愛せざるを得なかった。議論のベースは拙稿（近刊）で行っており、ここでは、福知山市の事例に関する記述を中心とする。

2 京都府福知山市の事例から¹⁾

福知山市の人口、農家戸数の推移は表1、表2に示した通りである。人口については旧福知山市部を中心に微増傾向にある。しかし、2006年に合併した旧三町（夜久野町、大江町、三和町）では大幅な人口減少が進み、結果として中山間地域を中心にいわゆる「限界集落」を多く生み出すこととなった。2015年国勢調査では、65歳以上の住民が半数以上を占める集落が京都府内に207集落あるが、このうち福知山市は、綾部市と並ぶ40集落²⁾と最も多くを占めている。こうした中で注目される

のは、人口減少が進む集落を対象とした I ターン移住の支援、集落支援員による集落活動支援が積極的に進められている点である。

I ターン移住者に対して、福知山市は2016年に地域振興部移住・企業立地推課移住定住促進係が設置され、定住促進事業が徐々に進められている状況であり、1990年代以降移住してきた I ターン者が集落活動に積極的な役割を果たす事例が見られる。

また、集落支援員（非常勤の特別職として一年任期、再任は妨げない）については、福知山市は2名の兼任支援員が配置されているが、行政経験者から I ターン移住者への転換が図られていることが特色である。

3. 福知山市の集落をめぐる状況と集落支援員による取り組み

福知山市は2006年に大江町、三和町、夜久野町を編入合併した（図1）。このうち旧福知山市は人口を維持し、近年は若干の増加が認められるものの、周辺部の旧三町では大幅に人口が減少している（表1）。

では、こうした人口減が進む地域に対してどのような取り組みを進めているのだろうか。福知山市は市域面積55,257ヘクタールのうち林野面積が76%を占め、全農地面積の50%以上が中山間地で、30%は条件の不利な農地となっている。こうした状況に対して、2009年度よ

表1 福知山市人口の推移（『国勢調査』）

| 年 | 1960年 | 1965年 | 1970年 | 1975年 | 1980年 | 1985年 | 1990年 | 1995年 | 2000年 | 2005年 | 2010年 | 2015年 |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 福知山市 | 87,211 | 79,976 | 76,844 | 78,458 | 81,398 | 83,057 | 82,791 | 82,555 | 83,120 | 81,977 | 79,652 | 78,956 |
| 旧夜久野町 | 8,394 | 7,492 | 6,716 | 6,279 | 6,059 | 5,828 | 5,521 | 5,198 | 4,869 | 4,453 | 3,973 | 3,504 |
| 旧大江町 | 10,386 | 9,135 | 7,490 | 6,948 | 6,520 | 6,315 | 5,991 | 5,990 | 5,705 | 5,426 | 4,920 | 4,426 |
| 旧三和町 | 6,941 | 6,175 | 5,464 | 5,228 | 5,031 | 4,919 | 4,772 | 4,651 | 4,448 | 4,240 | 3,871 | 3,424 |
| 旧福知山市 | 61,490 | 57,174 | 58,223 | 60,003 | 63,788 | 65,995 | 66,393 | 66,761 | 68,098 | 67,858 | 66,888 | 67,581 |

表2 福知山市の農家戸数の推移（『農林業センサス』）

| | 2010年 | 2015年 |
|---------|-------|-------|
| 総農家数 | 4,710 | 3,915 |
| 販売農家 | 2,541 | 2,062 |
| 専業農家 | 708 | 682 |
| 第一種兼業農家 | 195 | 121 |
| 第二種兼業農家 | 1,638 | 1,259 |

図1 福知山市合併前地図³⁾

り農山村活性化計画が策定され、2011年度からは「ふくちの農山村応援事業」が実施されている。この事業は、①年齢要件「65歳以上の方が集落人口の50%を占める集落」、②人口規模要件「人口が概ね50人未満の集落」、③地理要件「周囲から孤立しているなどの地理的条件が厳しい集落」の3つの条件を満たす集落に特別枠を設け、その活性化を目指すものである。この「ふくちの農山村応援事業」の実施当初は、市役所の退職者が対応してきたが、2013年から、外部から2名の集落支援員をおくようになり、「応援事業」の取り組み集落が当初の9集落から25集落に増加している。

この事業の実績として、特に、人口減・高齢化が進んでいる旧夜久野町、旧大江町、旧三和町で、Iターン移住者、集落支援員による“協働”型集落活動が進んでいる。ここでは、表3に示した5集落（Nは、集落支援員T氏の居住する集落で事業対象外）に焦点をあて、Iターン移住者、集落支援員などの「外部人材」がいかに集落活動に参画し、集落の取り組みを推進しているのかという点から検討したい。

表3 福知山市集落人口（住民基本台帳）

| 旧町名 | 集落 | | 2007.1 | 2010.1 | 2013.1 | 2016.1 |
|------|----|-----|--------|--------|--------|--------|
| 夜久野町 | N | 人口 | 80 | 83 | 86 | 81 |
| | | 世帯数 | 25 | 27 | 28 | 30 |
| 大江町 | O | 人口 | 31 | 34 | 31 | 26 |
| | | 世帯数 | 13 | 16 | 16 | 13 |
| | P | 人口 | 18 | 16 | 13 | 11 |
| | | 世帯数 | 12 | 12 | 8 | 7 |
| | Q | 人口 | 22 | 21 | 14 | 13 |
| | | 世帯数 | 11 | 12 | 10 | 9 |
| 三和町 | R | 人口 | 28 | 22 | 17 | 16 |
| | | 世帯数 | 12 | 12 | 8 | 7 |

出所：『福知山市の人口』

4. 夜久野町N集落におけるIターン移住者による集落活動⁴⁾

まずは福知山市に配属された二人の集落支援員のうち、Iターン移住者であるT氏（40代男性）の居住する夜久野町N集落の取り組みから見ていこう。N集落は夜久野町の西部にあり、人口は23世帯、91名である。N集落自体は「限界集落」ではないが、N集落より北に位置する集落はすべて高齢化率50%以上である。T氏は配偶者が2002年に旧夜久野町での仕事に就いたのを機にN集落に移住した。平日の大半は仕事のある京都市内で暮らし、週末を中心に夜久野町で生活をしている。配偶者が夜久野町内での就労するために斡旋された家を借り、山仕事以外の草刈りなどの村用に出席し、お宮当番も回ってくる。N集落の農家は集落営農を行っていないが、集落協定に基づく近隣集落との合同の防除柵設置、集落での田植え作業、稲刈り補助など共同農作業にも参加している。

表4はN集落の年間行事である。この中で、近年、Iターン移住者のT氏の働きかけにより新たな展開を見せているのが、5月の最終日曜に実施される茶畑再生活動・茶摘みイベントである。そもそもN地区は古くから茶の産地として知られ、1960年代後半にはNの他多くの集落で茶の栽培が進められ、1970年代から栽培がはじまった丹波黒大豆とともに特産品となっていた。しかし、1990年代に入ると茶を生産する農家は減少し、N集落では家庭内消費用の生産に限られ、出荷する農家はなくなっていた。こうした中で、茶畑再生の動きが進められたのである。

取り組みの経緯は、人口の減少、耕作放棄地の発生、世代間の交流の減少等の問題であった。集落の行事を縮小せざるを得ないという声があった一方で、新しい企画はできないかという2012年度自治会長の提案のもと、

表 4 N 集落年間行事

| 月 | 行事 |
|------|---|
| 1 月 | 互礼会（1 日） ※どんどやき（第 2 日曜） 寿初め（成人の日） もちつき |
| 2 月 | 節分（3 日） 初午参り（第 2 日曜） |
| 3 月 | モータークラブ懇親旅行（50 年以上続く、以前は単車、現在はバス） |
| 4 月 | 田圃の用水路の清掃（第 2 日曜午前中） 総会（第 2 日曜）／お花見 |
| 5 月 | 花祭り（第 2 日曜） 春道つくり（第 3 日曜） 茶畑再生活動・茶摘みイベント（最終日曜）★ |
| 6 月 | ※府道沿い花植え（第 2 日曜） ※「さなぼり」お楽しみ会、研修旅行 |
| 7 月 | 河川清掃（第 1 日曜） 夏祭り（第 2 日曜） |
| 8 月 | 子供会地藏盆（お盆の頃） 帰省の人が集まる |
| 9 月 | 老人会敬老会（第 2 日曜） |
| 10 月 | 天満神社 秋祭り（第 2 日曜） 7 集落合同 茶畑再生活動・芋ほりイベント（最終日曜）★ |
| 12 月 | ※府道沿いジャンボ門松つくり（第 2 日曜） 除夜の鐘つき（31 日）（住職の手作りそば） |

※印は近隣の 3 集落合同（みつわ会）行事

★印は I ターン移住者 T 氏企画の事業

集落内の月例集会で毎月様々な意見が取り交わされた。その中で、耕作放棄地問題や集落の景観維持だけでなく、地元の歴史を再認識でき、特性を生かした活動を行っていく方が活動も長続きし、特に高齢者たちが生きがいを持てるようになるのではないかという意見でまとめ、N の茶畑を整備再生する取り組みを行うことに決定した。荒廃した茶畑を整備しながら、地元住民も地域内の方から製茶技術を学び、なおかつ茶摘み体験のない都市住民に実地体験の場を提供していくことによって、地域の景観を守るだけでなく、地域内の世代間交流、都市と農村の地域間交流を目指すものである。この事業の企画・推進・交流人口の獲得において、T 氏が大きな役割を果たしていく。

活動にあたって「N の魅力再発見」実行委員会を立ち上げて運営することが決定された。委員の構成は、固定スタッフである実行委員長、実行副委員長（現 2 名）を中心に、自治会長、副会長、上組長、中組長、下組長、老人会会長、西友会（青年会）会長、子供会会長、すみれ会会長（婦人会）、農区長など、その年の集落内の各会の役員には必ず委員として関わってもらうように取り組んだ。集落構成員の高齢化が進んでいることから、負担にならないように配慮しつつも、集落構成員のすべてが関わるができる活動としたのである。

立ち上げの 2013 年度は 3 月から下草刈りと剪定を開始、5 月のイベント当日は集落内 40 名、T 氏のネットワークを中心に集まった集落外 30 名、計 70 名が参加し、茶生産の歴史を地元の人から説明を受けてから整備された茶園で茶摘みを体験した。40kg の茶を摘み取り、うち 3kg は手作業で製茶体験をし、残りの 37kg は地元の製茶工場で製茶し、参加者に後日配布した。子どもたちは地元の高齢者たちに教わりながら手作業で製茶をして

いく。昼食はシカ肉カレーと地元で採れた山菜の天ぷらが、地元婦人会の調理によって振る舞われた。その後、6 月の剪定作業、9 月の下草刈り、施肥、11 月の防獣対策用ネット張りと一緒に一年を通じて整備をし、N 集落における毎年 5 月の恒例の集落行事に結びつけていく。

T 氏はこの集落活動の特質を次のように指摘する。①単に新しいことに取り組むのではなく、地域の歴史性を引き出すことで高齢者が参加しやすくなる。②地元住民のあらゆる世代に役割をもたせることで、地元住民の全員参加を促す。③地域に眠る先人の知恵を引き出すことによって高齢者に生きがいを与えることで、家族間の世代間交流を促す。④都市住民には学習の場となりうるものを提供し、イベントのリピーターを確保する。⑤必ず会報を作り（年 6 回発行）、全集落構成員に配布する。この会報では参加者全員の顔が写るように配慮し、活動を目に見える形にすることで、参加してくれた人々に達成感を与え、やる気を維持させる。以上の点は、あくまでも集落の構成員が主体であることを意識しつつ、I ターン移住者のネットワークを生かした集落活動の活性化の取り組みと言える。

さらにこの活動は、隣接する三集落合同の活動（みつわ会）、および隣接する集落で 35 年続く親睦・地域交流活動団体である「居母山クラブ」にも波及していく。京都市内の寺院の研究員でもある T 氏のネットワークにより、琉球民謡グループの集落イベントでの演奏、千葉県を中心に竹林再生、朝市など農と環境をテーマに活動を続ける NPO 法人トージバとの協働による交流事業へと展開された。また、東日本大震災、ネパール地震の支援に、N 集落メンバーや「居母山クラブ」の活動をつなげるなど、N 集落、および周辺集落の活動が外部にひらかれつつあり、I ターン移住者による集落活動の新たな展

表5 福知山市集落支援の取り組み（世帯数、人口は住民基本台帳、2016年1月現在）

| 集落 | 世帯 | 人口 | 2013年度取組 | 2014年度取組 | 2015年度取組 |
|-----|----|----|-----------------|-----------------|-------------------|
| O | 16 | 31 | 棚田体感ツアー | 棚田体感ツアー | 棚田体感ツアー、どぶろくづくり体験 |
| P | 8 | 13 | 地区マップ（パンフレット作成） | 地区マップ（パンフレット作成） | 炭焼き小屋の補修 |
| 橋谷 | 22 | 34 | — | 防災備品倉庫の修繕 | 消火栓ホースの格納庫等の設置 |
| Q | 9 | 13 | 畳の張り替え | 大型ストーブ、防災グッズの購入 | 給湯器の設置。会場内のLED化 |
| 小原田 | 39 | 77 | 防災グッズ購入 | 玄関と屋根の修繕 | 公民館の屋根の修繕 |
| 日藤 | 9 | 17 | — | — | — |
| 在田 | 22 | 40 | 畳の張り替え | 会議机といすの購入 | — |
| 下野条 | 25 | 57 | 雨樋の修繕 | 公民館の電球のLED化 | 坐椅子の購入 |
| 上野条 | 20 | 36 | 絵手紙教室他 | 絵手紙教室他 | 集落便りの発行、絵手紙教室 |
| 坂室 | 8 | 37 | 防獣網の設置 | 防獣網の設置 | 公民館の天井の修繕 |
| 西松 | 25 | 55 | 窓のサッシ化 | エアコンの設置 | 坐椅子の購入 |
| R | 8 | 17 | 防獣用檻の購入設置 | 公民館周辺の整備 | 公民館の屋根の修繕、LED化 |
| 加用 | 7 | 13 | 紫ずきん共同栽培 | 紫ずきん共同栽培 | — |

開を見て取ることができる。

5. 集落支援員の協働活動⁵⁾

福知山市ではもともと、補助金の活用などに精通した市の退職者を集落支援員として雇用していた。しかし、2013年度より、行政の立場というよりも、より集落との協働ができる人材をという目的で、地域に居住する住民を登用した。そのうちの1名がIターン移住者のT氏で、もう1名は市内の70代の民宿経営者である。

集落支援員の職務は、①農山村集落の巡回、状況把握、②農山村集落の住民の意見集約、③市又は農山村集落の住民が行う振興施策への協力、④担任する集落点検の実施、集落での話し合いの促進、将来に向けた集落ビジョンの作成支援等である。集落の活性化のために企画・申請された事業に対し、年間1集落あたり10万円の補助金（100%補助率）を支給する（2016年度より半額の5万円）。この制度に該当する事業内容としては、農産物の振興、農地の保全、放棄耕作地対策、有害鳥獣対策、緊急時避難の支援体制、集落施設の維持管理、環境景観の維持管理、地域のPR活動等となっている。

T氏は可能な限り集落の会合に出席しつつ、集落の現状、ニーズの把握を続けていった。2014年9月に福知山市で深刻な被害をもたらした水害の際には、ボランティアを募り支援するなど、緊急時の対応も随時実施した。また、仏教美術を専攻し、京都市内の寺社で研究員として働くキャリアを生かし、集落の歴史・文化を掘り起こす活動を通して信頼関係を築きつつ、事業化の可能性を模索していったのである。こうして、一貫して「支援は必要ない」と事業を活用しない1集落を除き、表5にまとめた協働事業につなげていく。

T氏によると、集落支援を開始した際の実感として、

全体的に「あきらめ」が基調にあったというが、集落でのニーズ把握と対話を通じて少しずつ取り組みが進められている状況を見て取ることができる。内容については年間10万円の補助金をもとに必要な備品の購入が多くなっているが、集落での事業を発展させ、補助金の分配という役割だけでなく、T氏の人的ネットワークによる“協働”型集落活動への展開も認められる。次に、特に条件が厳しい4集落の事例から、いかに集落支援員による新たな協働事業が進められているかに焦点をあてて検討してみたい。

6. 旧大江町、旧三和町4集落における集落支援員との協働事業

(1) O集落⁶⁾：棚田保全活動、どぶろく体験を通じた集落支援

O集落は大江町最北部に位置する集落で、2016年度、12世帯、29名、高齢化率は50%を超えている。この地区には棚田があり、1997年から2011年まで棚田農業体験ツアー（年間3回、年会費3万円）が進められてきた。1999年には「日本の棚田百選」に選定され、棚田オーナー制度が始まる。年会費5万円、1組約4a、収穫した約150kgの米を受け取ることができ、当初の6組から現在は10組になっている。また、2007年に丹後天橋立大江山国定公園特別地域に指定され、モデルフォレスト制度を活用した企業参加が見られるなど、棚田を中心とした集落と行政、企業、都市住民との協働が進んでいる。その成果として2016年9月に開催された田植え・稲刈り体験に100名以上が参加しているように、交流人口が極めて多くなっている。

こうした交流事業により、2015年には服飾デザインをしている20代の夫婦が移住し、滋賀県の和菓子会社

が研修所として古民家を購入するなどIターン移住者が一定数生まれ、集落活動にも参加するようになってきている。しかし、全体的な人口減少が止まらないため新たな人口増を目的とした交流事業が模索され、Iターン移住者であるU氏、集落支援員T氏と協働の事業が展開されることとなった。2015年度O地区の自治会長U氏（60代男性）は、1997年に棚田体験ツアーをきっかけに滋賀県から夫婦で移住し、無農薬のブルーベリー栽培（約300本）、夏季（7～9月）のブルーベリー体験農園、カフェ、農家民宿、どぶろく販売（どぶろく特区申請）など幅広い事業を展開している。集落においても、2014年度副会長（会計）、2015年度会長と地域の活動に貢献している。

集落支援員T氏との協働事業としては、2013～2014年度は棚田体感ツアーの支援を行ってきたが、さらに一歩進めるための新規事業として、2015年3月に「どぶろく講習会」を実施した。U氏はもともと、棚田で生産される米を利用してどぶろくの免許をとり、四合瓶で200本程度を通販、地元酒店での販売、北近畿丹後鉄道事業での活性化事業に活用してきた。この交流事業をさらに進めるため、U氏経営の農家民宿にて泊まりがけでどぶろくの仕込みを行う事業が企画され、京都市内のT氏の知人が7名参加した。2016年3月にも6名が参加するなど、棚田ツアーとともに、新たな交流事業に進展しつつある。T氏は事業の企画とともに、京都市内からの集客を担当し、集落への交流人口を増やす役割を果たしている。

(2) P集落⁷⁾：「限界」から交流活動へ

P集落は、旧大江町北部の標高が高く交通の便が悪い山間部にある。この25年で世帯数は半減し、高齢化が一気に進んでいる。傾斜地で棚田ではあるものの、耕作放棄地が多かったため「棚田百選」に選出されなかった。平日は福知山市街地に居住し、集落には土日に田の管理で帰ってくる人がいるが、集落の立地等の面でUターン者はあまり期待できないという。そのため、最近に移住者中心の地域づくりに目が向けられるようになった。

1990年に大阪府から子どもの病気がきっかけとなり、35歳でP集落に築100年になる古民家を購入し、Iターン移住したY氏（60代男性）が自治会長として活動している。福知山市内で高校、予備校の講師をしつつ、すべて手作業で無農薬の米作りを行っている。自治会長を引き受けるのは3度目で、年々会長の引き受け手が少なくなっている。集落の活動もP集落だけではまわらず、隣接の集落と共同で行うことが増えている。

昔は冬にみんなで酒を飲む会をやっていたが、今は集

落行事といえるものはない。その意味で、いわゆる「村おこし」的な活動は厳しいと考えている。なんとか現状維持をと考え、空き家の提供とIターン移住を模索しているが、10年前に入ってきた人が地域とうまくいかず、出て行ってしまったことがあった。このように、Iターン移住には地域の人たちとの折り合いの問題があり、今年度も空き家の賃貸の申請があったものの、家主は借家では手入れが大変で、できれば買って欲しいという意向のため、調整がつかなかった。

こうした厳しい状況の中でなんとか新たな集落としての取り組みを進めようと、集落支援員のT氏と集落の集会や、冬場の積雪の多い時期は福知山市内の喫茶店で打ち合わせを重ねていく。その結果、目に見える集落活性化、人口増の取り組みは期待できないものの、P集落は標高が高く、雲海を見ることができ、Iターン移住者の経営するそば屋もあるため、交流人口を増やすことを目的としたマップづくりを協働事業として実施した。さらに、2015年度には集落に残る炭焼き小屋の改修を含め、2014年まで実施し中断していた炭焼き講習会を再開させるなど、交流人口増の取り組みを集落支援員との協働で進めつつある状況である。

(3) Q集落⁸⁾：「限界」を見据えつつ持続可能な集落活動を模索

Q集落はここ10年で22世帯から9世帯に減少し、1世帯は施設に入所している。独居は5世帯で、集落の集会に出るのは5～6世帯である。現自治会長は83歳で、ここ数年は80歳代の住民3人で会長をまわしている。子どもの声は何十年も聞いていない。福知山市街に続く道路まで距離があるが、通学する子どもがいらないため除雪が後回しにされ、冬期は極めて不便になることがある。お宮当番、祭りは隣の集落と合同で実施していたが、祭りについては3～4年前から当番ができず辞退させてもらっているという。

今後の集落の見通しとして、退職で戻ってくる人はいるが、次の世代が戻る見込みは少ないという。実際、ある集落構成員の息子が結婚するときは、配偶者に集落の仕事をさせない、集落から出るという条件つきで認められたこともあった。そのため、あと5～10年はもつと予想するが、その後はなんとも言えないという。このように、集落のおかれた状況が厳しく、Uターンなどにより人が戻ってくることは考えにくい、それでも持続可能な集落活動を考えている。

こうした集落の課題に対して、集落支援員のT氏との話し合いにより、まずは集落機能を持続可能にするためのするための整備、特に防災活動を強化することを目標

に事業展開をはかった。「Qを元気にする会」を立ち上げ、企画、書類、報告書づくりを集落支援員のT氏が担う。1年目は畳を修復、2年目は大型ストーブ、防災グッズ購入、3年目は給湯器購入と備品が中心となっている。2年目の防災グッズは、隣の集落は水害による被害が多く、避難場所としてQ集落の集会所が使われるため、その整備として要望が出されたものである。ふすまの張り替えなどについては、市の予算執行上の問題のため、張り替え作業を集落の住民が協働で実施することで認められた。

集落の集まりには、年2～3回集落支援員T氏も参加している。現在のところ集落の構成員との話し合いで進められているのは、集落にあるお堂の歴史的価値を調査し、交流のためのマップ作りの企画である。「宗教」という問題で補修経費として使うことができない制約のために進められつつある取り組みではあるが、T氏の専門領域である仏教美術の知識を生かした集落の文化保存を目指す協働事業の萌芽を見ることができるだろう。

(4) R集落⁹⁾：Uターン移住を促進するための交流事業

R集落は、旧三和町の山間部奥深くにある集落で、現在は5世帯に減少している。現会長は10年前に移住してきた80代のIターン移住者の男性である。人口減少が進み、集落活動の維持が厳しい状況ではあるが、大阪、京都、兵庫などに居住する他出子のネットワークを活用し、Uターン移住者を呼び寄せることを最優先の課題に取り組んできた。

こうした目標に対して、集落支援事業が開始された当初の協働事業としては、集落の集会所に隣接するお宮の整備を計画した。しかし、宗教施設の整備ということで認められず、集落支援の予算は使えないため、最初の3年間は主として備品の購入や共同での草刈りなどの事業に充てることにした。しかし、Uターン移住者をターゲットとした取り組みが重要であると集落の話し合いであらためて確認され、2016年度には集落支援員T氏と協議し、京都市内で活躍する琉球民謡グループの演奏による交流事業を実施した。5世帯の集落ではあるが、これまでも毎年10月に大阪、京都などから他出家族が一同に集まるイベントを開催してきた。この会が若干マンネリ化していたという声もあり、新しい活動をということで企画されたのである。T氏と協働で企画された2016年10月の会では、例年よりも多い大阪、京都からの参加者が見られた。今後も、いかに跡継ぎとなるUターン者を増やす活動ができるかを重視し、集落支援員のネットワークを生かした協働事業を進める予定であるという。

7. まとめにかえて

以上、5集落における集落支援員による“協働”型集落活動のあり方を見てきた。いずれについてもそれぞれの集落がかかえる切実な課題を明確にしつつ、「外部人材」としての集落支援員の資源、特性を生かそうとする形で事業が進められていることがわかる。集落支援員のT氏は、予算使途の制約に苦しみつつも、それぞれの集落から出された問題を丹念に洗い出し、その歴史的状況を踏まえ、既存の集落活動の意向を確認していく。その上で、それぞれの集落にとって最優先の課題として浮かび上がったIターン移住希望者とのネットワーク、交流人口増、Uターン移住希望者とのネットワークなどに対応するよう、既存の集落活動から一歩進める協働事業へと展開している。

もともと、高齢化が進むことで6世帯のうち3世帯が転出してしまい活動できないという理由で事業を取りやめた集落もあるように、集落支援活動が困難をかかえているのは事実ではある。その一方で、人口減少・高齢化に対応してIターン移住者が集落活動の中心となるケースも多くなっており、集落支援員、Iターン移住者との“協働”型集落活動への期待が高まる基盤が形成されつつある。

福知山市では、基本的に集落支援員の力量に任せられているが、その活動の面では自治、農政、まちづくり、定住促進の補助金との調整がなされず、補助金の使用目的が限定されているなどの問題が多く集落で指摘されていた¹⁰⁾。行政の縦割り型の制度が十分整備されていない中で、集落支援員のT氏は、集落がかかえる切実な課題を集落の会合に参加しつつ丁寧に探り出し、集落ごとの現状と課題に合わせた取り組みを進めている。こうした活動は、地域活性化というような派手な成果には見えないかもしれないが、集落の主体性を尊重しつつIターン移住者のネットワークを活用し、集落活動の基盤を維持する地に足のついた“協働”のひとつのあり方と見ることができる。

付記

本稿は、JSPS 科研26285112（研究代表：西村雄郎）、および、JSPS 科研16K04084（研究代表：松宮朝）による研究成果の一部である。

注

1) 筆者の福知山市での調査は、2005年より夜久野町の集落活動に断続的に参加しつつ聞き取りを行っている。その一部は、小野田豪介氏との協働作業である（中島・小野田・松宮、2016）。なお、筆者の農村調査に関する議論は松宮（2010）を参照いただきたい。

- 2) 『京都新聞』2016年10月24日。なお、福知山市の農業をめぐっては、京都府農業会議編（1997）、荒木（2012）を参照。
- 3) 京都府ホームページ（<http://www.pref.kyoto.jp/gappei/map-north.html>）2017年3月30日取得。
- 4) 本節は、中島・小野田・松宮（2016）の一部を大幅に改稿している。
- 5) T氏からの聞き取りは、2014年から集落支援員としての活動に同行させていただく中で行っている。
- 6) O集落の調査は、2014年9月からの自治会長へのインタビュー、集落支援員の活動、行事への参加による。
- 7) 2016年3月の自治会長へのインタビュー。
- 8) 2016年3月の自治会長へのインタビュー。
- 9) 2016年10月の自治会長へのインタビュー、および行事への参加による。
- 10) 福知山市の集落支援員制は2017年4月より大きく改変されている。本稿の内容は2016年度までの調査に基づいている点を断つ

ておきたい。

文献

- 鯉坂学・河野健男・松宮朝，2016，「人口減少地域における定住促進施策と I ターン移住者の動向」『評論・社会科学』117: 1-94.
- 荒木幹雄，2012，『中国・近畿中山間地域の農業と担い手』昭和堂.
- 京都府農業会議編，1997，『京都府夜久野町における地域農業の実態と再編方向』.
- 中島頼孝・小野田豪介・松宮朝，2016，「集落活動と集落支援の創発」『愛知県立大学教育福祉学部論集』64: 77-96.
- 松宮朝，2010，「『当事者ではない』人間に何ができるのか？」宮内洋・好井裕明編著『〈当事者〉をめぐる社会学』北大路書房.
- 松宮朝，近刊，「I ターン移住者、集落支援員による「協働」型集落活動—京都府綾部市の事例から—」『年報 村落社会研究』53.
- 夜久野町史編集委員会編，2005，『夜久野町史 第一巻』.